

ASEAN 諸国の貿易不均衡問題

中 内 恒 夫*

On the Trade Imbalances of ASEAN Countries

Tsuneo NAKAUCHI*

This paper is comprised of three sections. The first contains a cursory review of the balance of trade and current accounts of ASEAN countries in the 1970s, made in order to grasp the salient features of trade imbalances of ASEAN countries. Interestingly, ASEAN's overall balance of trade vis-à-vis Japan has been favourable since the latter half of the '70s, due to the rapidly increasing export of resources including oil from Indonesia and Malaysia. Countries without a surplus of resources for export, namely Thailand, the Philippines and Singapore, have suffered deficits in the balance of trade with Japan. Inasmuch as ASEAN's balance of trade with Japan is on the whole favourable,

opportunities exist for these countries to seek a triangular solution through trade including the region and Japan. Thailand's surplus vis-à-vis Indonesia is a case in point.

Second, a detailed analysis by commodity of exports from Thailand and the Philippines to Japan has been tried with a view to discovering potentials for improvement. The major hope seems to be industrial products.

Third, somewhat longer-term relations between the pattern of ASEAN trade and the ASEAN and Japanese industrial structures are analysed with a view to finding effective means of economic cooperation by adjusting industrial structure.

I 序

ASEAN 諸国の貿易不均衡は大別して2種類に分けることができる。すなわち、資源輸出国であるインドネシアおよびマレーシアと、資源輸入国であるタイ、フィリピン、シンガポールであり、70年代を通じたいにおいて前者が対日出超国であり、後者が対日入超国である。

小論においては、まず ASEAN 諸国の対外収支を瞥見したのち、70年代の日本と ASEAN 諸国との貿易収支がどのように変化したかをみてみよう。この観察を通じて、

ASEAN 貿易構造が多角的な貿易構造としてもつ特徴と、対日貿易収支という面においてもつ特徴とを比較し、その性質を理解するとともに、長期的観点から ASEAN の貿易構造がどのようにあるのが望ましいかという問題を考察しよう。そのために可能な政策的インプリケーションも念頭に置くことにしよう。

一方、ASEAN 諸国は国際開発戦略の文脈の中で、農村や地域開発に刺激を与え、社会的正義を実現しつつ同時に成長率も高めようとしているが、徐々に工業部門が増大しつつあることは顕著な傾向である。このことと貿易構造との間にある関係をもてみるのが次の概観の課題である。

これらの概観ののち、第Ⅲ節において、タ

* 国際基督教大学教養学部; College of Liberal Arts, International Christian University, 3-10-2, Osawa, Mitaka, Tokyo 181, Japan

表1 ASEANの貿易収支（百万米ドル）

	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年
シンガポール	△1,480	△2,570	△2,750	△2,480	△2,330	△2,920
フィリピン	20	△760	△1,480	△1,430	△1,180	△1,810
タイ	△490	△700	△1,070	△590	△1,130	△1,260
マレーシア	540	100	280	1,470	1,260	1,490
インドネシア	480	3,590	2,330	2,880	4,620	4,950

資料：IMF, International Financial Statistics

イ国とフィリピンをとりあげ、対日貿易インバランスのケース・スタディーの結果をまとめてみよう。ここでは、商品別にはほぼ90%以上のカバリジをもつ商品群をそれぞれタイとフィリピンについてとりあげ、対日貿易インバランスが個々の商品レベルではいかなる状況を示しているかを描写するとともに、あえて、将来動向の予想をこころめてみよう。

国際開発戦略において、70年代の開発が分配面の不平等化を惹起したことが指摘され、それに対応して開発途上諸国が、総合的農村開発やBHNに注目しているのは事実だが、それはそれとして、工業化の進展も、統計的にみる限り顕著なものがある。

第Ⅳ節においては、この工業化と貿易不均衡との関連を考察し、工業化によって、第Ⅲ節にみたASEAN諸国のうち、主として農産品の輸出に依存するタイ、フィリピンが陥った対日貿易インバランスを緩和する可能性はあるかという点を考察する。そして結語的なⅣ節(ii)で、長期的な産業構造変化と貿易収支動向について触れ、現今の対日貿易インバ

ランスがそもそも、特殊的・個別的な問題か、それともいわば長期的発展過程の必然的的局面であるかを考察することにする。

II ASEAN地域の対外貿易収支構造

(i) 多角的貿易均衡か2国間均衡か

まずASEAN5カ国の貿易収支の状態をみてみると、表1のごとく、資源輸出国はプラス、その他はマイナスという形を示している。特にインドネシアは大部分が石油の輸出に依存しているために、1974年に石油価格が高騰するや、貿易収支の出超幅は前年の4億8,000万ドルから36億ドルに急増をみせている。黒字幅は75年に一時減少をみせるが、1978年には50億ドル近傍に達し、日本の石油支払い代金の急増と歩調を合わせているのが注目される。資源国の貿易収支が価格条件の改善とともに黒字の増大傾向をみせるのは、マレーシアについても顕著であるが、石油のプロポーションが少なく、インドネシアほど急激な増大を示してはいない。

表2 ASEANの経常勘定（百万米ドル）

	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年
シンガポール	△570	△1,110	△610	△700	△470	△750
フィリピン	480	△210	△920	△1,100	△830	△1,220
タイ	△50	△90	△610	△440	△1,100	△1,200
マレーシア	110	△490	△310	730	550	△20
インドネシア	△480	600	△1,110	△910	△50	△1,220

資料：IMF, International Financial Statistics

表3 ASEANの資本勘定(百万米ドル)

	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年
シンガポール	720	500	580	850	620	610
フィリピン	210	870	1,110	1,200	1,010	1,760
タイ	320	530	470	540	1,060	1,420
マレーシア	340	700	680	470	200	700
インドネシア	740	410	360	2,000	1,100	1,410

資料: IMF, International Financial Statistics

一方、これら2国のような資源輸出の利点をもたぬシンガポール、フィリピン、タイの3国は貿易収支の赤字幅が増大傾向を示している、ASEAN 5カ国が明暗二様に截然と分けられているのが分かる。日本その他の地域的構成の問題は後述することにしてひとまず、経常収支勘定をみてみると、表2のごとくになる。

ここで目につく事実は、表示の5カ年間を通じ、ほとんどすべての国々が赤字を示していることである。これは、資源輸出国が貿易収支における出超を上まわる、主としてロイヤリティーからなる用役支出を余儀なくされるためである。これに比して、シンガポール、フィリピン、および当該期間の前半のタイは、用役収入がプラスであるために貿易収支よりも小さな経常収支赤字を示している。このことから分かるように、膨大な資源輸出を

もつインドネシア、マレーシアは、一面ではASEANの中で外貨取得上の強力な武器を有すると同時に、他面では、用役支出が大きく経常収支を圧迫するという構造をもっている。ASEAN地域の貿易均衡化を考えるばあい、この構造的特徴を念頭に置く必要がある。これらの経常収支の赤字を補填するために必要な純資本移動は表3のごとくであった。

以上はASEAN諸国の対世界収支を示すものであったが、日本とASEANに注目して貿易収支を求めてみると表4のごとくになる。ASEANに対する日本の輸出は年を追って増大しているが(年増加率は当該期間2.2%から49.4%の間)、輸入も年率11.6%から79.8%の間で年によってはかなり大幅な増大をみせて、傾向的な入超を示していることが分かる。ASEANに対する日本の貿易収支がマイナスであることは一応定着した構造と

表4 日本—ASEAN 貿易収支(百万米ドル)

	日本の輸出		日本の輸入		収支
ASEAN 総計 1974	5,408	+49.4%	7,961	+79.8%	-2,553
1975	5,925	+9.6	6,365	-20.0	-440
1976	6,058	+2.2	7,741	+21.6	-1,683
1977	6,839	+12.9	8,869	+14.8	-2,030
1978	8,751	+26.5	9,917	+11.6	-1,166
1979*	2,080	(8.9)	3,087	(12.5)	-1,007

資料: 大蔵省通関統計

輸出: FOB, 輸入: CIF

%……対前年増加率

()…対世界貿易シェア

* 1-3月

表5 日本—ASEAN 貿易収支（百万米ドル）

		日 本 の 輸 出		日 本 の 輸 入		収 支
インドネシア	1974	1,450	+60.8%	4,572	+106.5%	-3,122
	1975	1,850	+27.6	3,430	-25.0	-1,580
	1976	1,639	-11.4	4,091	+19.3	-2,452
	1977	1,797	+9.6	4,977	+22.2	-3,180
	1978	2,095	+16.6	5,247	+5.0	-3,152
	1979*	411	(2.2)	1,631	(6.6)	-1,220
マレーシア	1974	708	+58.0	979	+26.2	-271
	1975	566	-20.1	691	-29.4	-125
	1976	704	+24.4	1,362	+97.1	-658
	1977	863	+22.6	1,560	+14.5	-697
	1978	1,157	+34.1	1,900	+21.8	-743
	1979*	284	(1.2)	597	(2.4)	-313
フィリピン	1974	911	+46.9	1,105	+34.8	-194
	1975	1,026	+12.6	1,121	+1.5	-95
	1976	1,114	+8.6	793	-29.3	321
	1977	1,100	-1.3	897	+13.1	203
	1978	1,546	+40.6	1,058	+18.0	488
	1979*	394	(1.6)	365	(1.3)	29
シンガポール	1974	1,388	+49.3	619	+177.6	769
	1975	1,524	+9.8	399	-35.5	1,125
	1976	1,531	+0.5	647	+62.2	884
	1977	1,719	+12.3	687	+6.2	1,032
	1978	2,325	+35.3	869	+26.5	1,456
	1979*	555	(2.4)	230	(1.1)	325
タイ	1974	951	+32.1	686	+74.1	265
	1975	959	+0.8	724	+5.5	235
	1976	1,070	+11.6	848	+17.1	222
	1977	1,360	+27.1	748	-11.8	612
	1978	1,628	+12.4	843	+12.7	785
	1979*	436	(2.6)	264	(1.1)	172

資料：表4と同じ

* 1-3月

考えることができるようであるが、これについては、より以前の時期との比較において、後述することにして。

さて、ASEAN 5カ国のそれぞれと日本の貿易収支を示したものが表5であり、前に述べたように、資源輸出国であるインドネシア、マレーシアが対日出超を、そしてフィリ

ピン、シンガポール、タイが対日入超を示している。¹⁾

1) 表の下部に示してある通り、表4,5は日本の通関統計であるから、表1～3および表7～10と直接に比較するには適当でない。周知の通り輸入はCIFであるから、IMFのものより日本の入超額が若干大きくなる点を考慮する必要があるが、大まかな動向を概観するためには支障ないであろう。

表6 日本の対世界貿易収支（百万米ドル）

			日 本 の 輸 出		日 本 の 輸 入		収 支
世 界	1974		55,536	+50.4%	62,110	+62.1%	-6,574
	1975		55,753	+0.4	57,863	-6.8	-2,110
	1976		67,225	+20.6	64,799	+12.0	+2,426
	1977		80,495	+17.7	70,809	+9.3	+9,686
	1978		97,543	+21.2	79,343	+12.1	+18,200
	1979*		23,320		23,427		-107

資料：表4と同じ

* 1-3月

同じ資源輸入でも、インドネシアのように石油の割合が大きい国と、マレーシアのようにその割合が比較的小さい国とを比較すると、日本の輸入額の割に、マレーシアに対する入超額が小さい。石油輸入と日本の入超との間にある密接な関係がここにも反映しているといえるだろう。

フィリピンについては1974、75年の貿易収支は日本の入超になっているが、76年以降は日本の出超に転ずる。輸出はほぼ趨勢的に伸びているから、この転換をもたらしたものは輸入の減少であることが分かるが、事実、表5にもある通り、1976年の輸入の落込みがいちじるしい。この内容については次節のケース・スタディーでみることにしよう。

シンガポールおよびタイの貿易収支におけるわが国の出超も総じてほぼ同じ速度で増大しつつあるが、これは日本からのこれらの国に対する輸出がほぼ同じ率で伸びているのに、日本の輸入が停滞傾向にあるためである。

再び表4へ返ってみると、上述の各国の対日貿易収支を総合した結果は日本側の入超である。しかし、ここで日本の対世界の貿易収支に目を転じてみると、表6のごとくである。すなわち、1974年には第1次石油ショックを反映して66億ドルの赤字を示しているが、これが翌1975年には21億ドルに減少し、さらに76年には24億ドルの出超に転じ、その後引き続き出超幅を拡大して、78年には182億ドルの黒字幅を示すことになる。これは輸入をは

表7 ASEAN 貿易マトリックス 1972年（FOB百万米ドル）

輸出国	輸入国									
	1 インドネシア	2 マレーシア	3 フィリピン	4 シンガポール	5 タイ	6 ASEAN	7 米 国	8 日 本	9 その他	10 計
1 インドネシア	—	16	3	176	0	195	231	746	376	1,548
2 マレーシア	13	—	27	400	16	456	238	295	729	1,718
3 フィリピン	4	1	—	8	2	15	434	358	298	1,105
4 シンガポール	71	453	14	—	76	614	337	139	1,091	2,181
5 タ イ	35	54	28	94	—	211	136	224	510	1,081
6 ASEAN	123	524	72	678	94	1,491	1,376	1,762	3,004	7,633
7 米 国	307	130	366	385	170	1,358	—	4,965	43,472	49,795
8 日 本	616	264	458	706	523	2,567	8,981	—	17,109	28,657
9 そ の 他	361	635	429	1,512	652	6,156	43,533	16,051	224,175	289,915
10 計	1,407	1,553	1,325	3,281	1,439	11,572	53,890	22,778	287,760	376,000

資料：IMF, International Financial Statistics

表8 ASEAN 貿易マトリックス 1977年 (FOB百万米ドル)

輸入国 輸出国	1 インドネ シア	2 マレーシ ア	3 フィリピン	4 シンガポ ール	5 タイ	6 ASEAN	7 米 国	8 日 本	9 その他	10 計
1 インドネシア	—	21	126	1,004	5	1,156	3,011	4,361	2,324	10,852
2 マレーシア	19	—	76	970	86	1,151	1,105	1,245	2,587	6,088
3 フィリピン	22	29	—	65	9	125	1,114	732	1,123	3,094
4 シンガポール	3	1,182	118	—	231	1,534	1,279	787	4,641	8,241
5 タイ	289	187	13	219	—	708	333	708	1,744	3,493
6 ASEAN	333	1,419	333	2,258	331	4,674	6,842	7,833	12,419	31,768
7 米 国	763	561	876	1,172	510	3,882	—	10,522	105,760	120,164
8 日 本	1,812	870	1,108	1,732	1,370	6,892	20,077	—	54,157	81,126
9 そ の 他	2,958	1,357	1,701	4,642	2,134	12,791	120,635	48,812	261,808	444,046
10 計	5,866	4,207	4,018	9,803	4,345	28,239	147,554	67,167	434,144	677,104

資料：表7と同じ

るかに上まわって輸出が急速に増大したためである。強力な輸出競争力に支えられて、日本のグローバルな貿易収支は、第1次石油ショックのあと堅実な推移をみせるが、その結果、日本経済は ASEAN と世界の他の地域との間にあって三角貿易的均衡の役割を果たしていることが分かる。すなわち、日本経済は対世界貿易によって得た出超の一部を ASEAN 諸国にトランスファーしているという全体的構造が浮かんでくるのである。

それでは、ASEAN 諸国の各地域に対する貿易構造はどうなっているであろうか。IMF のデータに従って ASEAN の貿易マ

トリックスを作ってみると、表7 (1972年)、表8 (1977年) のようになる。この時期は、典型的に日本の対 ASEAN 貿易収支の比較を行うために選んだものである。表7によれば ASEAN 域内貿易は全体のほぼ20%を占めているが、1977年になるとこれがほぼ15%となり、ASEAN は他地域に対する依存度を高めている。米国のシェアは1972年の18%から77年には22%に増大しているが、日本のそれは23%から25%に増大していることが分かる。その他の地域は一定であるから、ASEAN は地域内貿易のシェアを米国および日本、なかならず日本にシフトさせたことが分かる。

表9 ASEAN 貿易収支マトリックス 1972年 (百万米ドル)

	1 インドネ シア	2 マレーシ ア	3 フィリピン	4 シンガポ ール	5 タイ	6 ASEAN	7 米 国	8 日 本	9 その他	10 計
1 インドネシア	—	3	—1	105	—35	72	—76	130	15	141
2 マレーシア	—3	—	26	—53	—38	—68	108	31	94	165
3 フィリピン	1	—26	—	—6	—26	—57	68	—100	—131	—220
4 シンガポール	—105	53	6	—	—18	—64	—48	—567	—421	—1,100
5 タイ	35	38	26	18	—	117	—34	—299	—142	—358
6 ASEAN	—72	68	57	64	—117	—	18	—805	—3,152	—3,939
7 米 国	76	—108	—68	48	34	—18	—	—4,016	—61	—4,095
8 日 本	—130	—31	100	567	299	805	4,016	—	1,058	5,879
9 そ の 他	—15	—94	131	421	142	3,152	61	—1,058	—	2,155

資料：表7および表8より計算

表10 ASEAN 貿易収支マトリックス 1977年 (百万米ドル)

	1 インドネ シア	2 マレーシ ア	3 フィリピン	4 シンガポ ール	5 タイ	6 ASEAN	7 米 国	8 日 本	9 その他	10 計
1 インドネシア	—	2	104	1,001	-284	823	2,248	2,549	-634	4,986
2 マレーシア	-2	—	47	-212	-101	-268	544	375	1,230	1,881
3 フィリピン	-104	-47	—	-53	-4	-208	238	-376	-578	-924
4 シンガポール	-1,001	212	53	—	12	-724	107	-945	0	-1,562
5 タイ	284	101	4	-12	—	377	-177	-662	-390	-852
6 ASEAN	-823	268	208	724	-377	—	2,960	941	-372	3,529
7 米 国	-2,248	-544	-238	-107	177	-2,960	—	-9,555	-14,875	-27,390
8 日 本	-2,549	-375	376	945	662	-941	9,555	—	5,345	13,959
9 そ の 他	634	-1,230	578	0	390	-372	14,875	-5,345	—	9,902

資料：表7および表8より計算

さて、表7と表8から輸出マイナス輸入を求めれば貿易収支が得られるので、それをまとめたものが表9 (1972年) と表10 (1977年) である。8欄を横にみていくと、表9では、日本は1972年に ASEAN 全体に対し8億ドル強の出超をもっていたのが、表10の1977年になると、9億4,100万ドルの入超を示していることが分かる。つまり、1972年においては、インドネシア、マレーシア2国に対する入超額をフィリピン、シンガポール、タイ3国に対する出超額が補って余りあったのが、1977年になると、日本の石油輸入、天然資源輸入の増大のため、3国への輸出額をもってしては補填できぬほどであったことが分かる。これには、中東石油依存の危険を分散させる政策をとったことが大きく影響している。この5年間に実に差引き17億4,600万ドルの対 ASEAN 貿易収支悪化を生じたことになるのである。

このように出超の大きい資源輸出国であるが、これらの国も入超をもつ相手国が存在するところが興味深い。1欄、2欄を縦にみると、負符号のついていない国がそれぞれある。いま、表10の1977年についてみると、1欄のインドネシアについては、タイの2億8,400万ドルが、また、2欄のマレーシアに

ついては、インドネシアの200万ドルは不思議はないとしても、シンガポールの2億1,200万ドルとタイの1億100万ドルが対マレー貿易収支の黒字を示していることが分かる。結局マレーシアは対 ASEAN 地域全体では2億6,800万ドルの収支赤字を計上している。だが、さすがにインドネシアの石油輸出額は多額であって、対 ASEAN でも8億2,300万ドルの黒字を計上している。この関係の含意は、インドネシアとマレーシアは、主として日本と米国に対する巨額の貿易収支のプラスを利用して、ASEAN 内の入超国からの輸入を増やす可能性があるということである。この三角貿易の方向に出超を定着させ、増大させていくことができれば、ASEAN の貿易はグローバルには均衡に近づくことができるのであって、本来貿易収支のインバランスという問題はグローバルな形で均衡化できればよいはずである。個々の国のそれぞれについて貿易収支均衡を図ることは、政治的意義は別として、経済的観点からは、動態的な可能性を縮小してしまう結果を生ずるであろう。もっともこの考察は、貿易収支にもとづいた結果であって、初めにも述べたように、経常収支でみると、用役支出が多いために、インドネシア、マレーシアとも、巨額な黒字が消

減してしまう。だが、ここに将来の可能性との関連で何がしかの示唆を読みとることができるであろう。すなわち、資源国の黒字を相殺する要因たる用役支払いを減少する工夫をすること、そして生じた購買力にむけて、入超国の輸出を伸ばす可能性を考えることである。従来これら輸出の多くは農業産品であったが、将来は一層多様化した形で、工業製品をも含む域内貿易の流れが増大することが望ましい。この5年間に生じたASEAN域内貿易のシェアの低下を逆転せしめる方向に政策論的考察をすすめる必要がある。

(ii) 地域貿易依存度の上昇と工業化

ASEAN域内貿易を一層盛んにするためには、農産物に加えて、製造業品の貿易が域内で活発に行われる必要がある。特に、上に述べたコンテクストからいえば、域外に対して貿易収支が逆調である国から順調の国へ輸出が盛んに行われることが望ましい。軽工業が盛んになっていく上で価格の上からも品質の上からも、僅かではあっても、交換・貿易を生ずるには十分なだけの技術の差が生じて分業が行われ、規模の経済が生ずることが望ましいわけである。

だが、工業化は段階的に一時的には輸入依存度を高め、貿易収支に対する圧迫要因をなすばあいが多い。貿易のパターンは必然的に産業構造と密接な関係を有するのである。消費財の輸入代替がすすんでいる国では、中間財の輸入が増大し、これが貿易収支を圧迫する。表11は、フィリピンとタイとで、消費財

表11 ASEAN の輸入比率（単位％）

		食 料	消費財	消費財 原 料	資本財 原 料	資本財	合 計
インド ネシア	1960	23	22	24	4	27	100
	1965	21	15	16	10	39	100
	1970	15	12	16	10	48	100
	1975	12	6	25	6	51	100
マレー シア	1960	24	21	24	12	19	100
	1965	22	19	21	8	29	100
	1970	18	17	22	9	35	100
	1975	18	16	19	7	40	100
フィリ ピン	1960	15	12	19	8	46	100
	1965	19	8	23	5	44	100
	1970	10	6	29	10	46	100
	1975	9	10	37	5	39	100
シンガ ポール	1960	17	22	42	9	10	100
	1965	20	24	28	9	19	100
	1970	13	24	25	8	30	100
	1975	9	16	32	7	36	100
タ イ	1960	8	31	12	11	38	100
	1965	6	26	18	7	43	100
	1970	4	19	23	8	46	100
	1975	3	11	37	8	42	100

資料：UN, ESCAP, Yearbook of Economic Statistics

原料の輸入構成比が1960年からの15年間にいちじるしく高まったことを示している。資本財の輸入構成比は、フィリピンを除いて顕著な増加を示しているが、特にシンガポールにおいてこの増加が大きく、1960年の10%から1975年には36%に高まっている。この増加率はインドネシアやマレーシアにおいても大きく、それぞれ24パーセンテージ・ポイントと21ポイントであった。タイも緩やかに資本財輸入比率の高まりをみせているが、むしろこの国では、なるべく自国財を使用しながら消費財の生産に努めた結果、完全消費財の輸入比率が3分の1近くに減少した反面、前述のごとく、消費財原料の輸入比率が増大したのであった。

ところが、インドネシアでは、同じように消費財の比率が減り、資本財の比率が増えているが、タイと違って消費財原料の比率はやや減少気味に推移している。このタイとインドネシアの輸入パターンの相違は興味深い。タイは資本財の輸入をなるべく節約し、インドネシアは消費財原料の輸入を節約している。これは両国の産業発展のパターンが異なるからであって、タイは製造業の消費財、たとえば繊維・雑貨などの輸入代替に努めた結果、消費財原料の輸入需要が増大したが、インドネシアでは、タイに比較して一層集約的な方法により、天然資源を利用する加工業に力点を置いたのである。この相違には両国の天然資源の賦存率の差と製造業の発達程度の差が反映していると考えることができる。

マレーシアも、インドネシアと多少とも同様のパターンの輸入構造をもっていて、資本財の輸入比率が増大している。これは天然資源の輸出によって、インドネシアと同様に潤沢な外貨収入を資本財輸入にむけているのである。

インドネシアにせよマレーシアにせよ、いずれも工業化の過程において先進国からの輸入が急速に増大するのは、工業品に対する所得弾力性が高いためであるが、その結果として、成長が加速されると貿易収支が圧迫される。輸出すべき天然資源を十分もたぬ ASEAN の他の3国においてもこの点は同様であるから、これらの国の貿易収支は赤字幅が増大傾向を示すのである。

そこで、ASEAN 地域としてこの貿易収支赤字を軽減するためには、食料、消費財、消費財原料のできるだけ多くを域内貿易によって調達しうるようにし、タイ、フィリピン、シンガポールからインドネシア、マレーシアに輸出しうるように ASEAN 貿易の方向性を与えていくことが望ましい。東南アジアの国々は、タイを除き、長年の植民地支配を経

験したため、地域の水平的な交流の歴史的経験にとぼしく、宗主国との関連を中心にしてきた過去の経緯がマイナスになっているが、まず域内貿易からこうした傾向を是正し、近年国連で主張されている TCDC (Technical Cooperation among Developing Countries) に多様な機会を創出し、将来は資本の移動も盛んにして、一層緊密な経済的相互依存関係が発展していくことが望まれるのである。

III 商品別対日輸出貿易の

ケース・スタディー

——タイおよびフィリピン——

(i) 貿易不均衡発生理由

本節ではタイとフィリピンを例にとって、貿易収支不均衡の現状を商品別に検討し、将来の動向を考えてみたいのであるが、この2国についてまず、なぜ貿易不均衡が生じたかを略説することしよう。

大きく分けて不均衡の発生した理由は二つある。第1は天然資源にみるべきものがない、ということで、特に石油の大部分を輸入にたよらなくてはならぬ構造をもっている点。第2は、かなり積極的な経済成長策をとっていることで、1970年代最初の7年間の成長率はフィリピンが6.4%、タイが7.1%を示している。輸入代替的工業化政策が推進された結果、中間財輸入がいちじるしく増加した。

これら2国の貿易インバランスの形態をみると、経済発展の程度に応じて産業構造が異なり、それにつれて輸出入の構造が変化している過程が反映されていることが分かる。フィリピンは第1次石油ショック後、急激な貿易収支不均衡に陥ったが比較的高い成長率を示すことができた。だが、高成長と貿易不均衡はトレード・オフの関係をもつことになりがちである。しかし多くの開発途上国と同様、成長のはずみのついたフィリピンやタイ

が、貿易不均衡を回避するために成長率を下げることに政治・経済的な抵抗が大きい。

では、いかにしてこの二つの相反する要因を調和させることができるのであろうか。貿易収支の均衡と好ましい成長率の維持とを両立させるためには、当該国に利用可能な硬軟両義の資源の効率的利用が必要となってくる。第一次産業であろうと第二次産業であろうと、比較優位産業を伸張する必要がある。そして国内市場を満たした余剰が輸出にまわるというのが正常な貿易の型である。フィリピンは比較的正常な貿易関係の中で、第一次産品の輸出を中心にし、さして大きな不均衡をもたなかったにもかかわらず、1974年以降、石油輸入が激増するにおよんで、経常収支においても70年代末には10億ドルを上まわる赤字を示している。そして、伝統的・非伝統的輸出品のみで収支均衡を図ることはできなくなってきた。

だが、こうした基本構造をみると、収支悪化要因として代表的な石油輸入による圧力が、近年発見された油田、天然ガス田によって大いに軽減される可能性をもち始めたことは、将来に明るい見通しをもたらしている。フィリピンではパラワン島沖に豊富な油田が発見され、楽観的見方によれば1980年代の中ごろまでに同国エネルギー需要の50%、やや厳しい見通しに立っても25%を供給しうる可能性が開けた。タイでも、シャム湾のサタヒップ南方 400 km の天然ガス田が1981年内に供給可能であり、1985年には同国総エネルギー需要の20%を供給しうる見込みがでてきた。これらのことは、対日貿易不均衡それ自体を改善するものではないにしても、もともと対日貿易不均衡という問題それ自体が全体の貿易収支マイナスから派生した問題であり、その中で最大の輸入超過相手国という意味で問題とされている点を考えるなら、その問題解決につながる鍵と考えられなくもない。

い。

だが前にも述べた通り、これらの国は資本財や工業原料などで大きな対日貿易収支マイナスをもっている。これら製造品の輸入の所得弾力性は、おおむね一次産品に対するそれに対して高いので、そうなのである。

表11でフィリピンの輸入構成をみると、その資本財輸入が ASEAN の他の国と違って減少しているのは、単に天然資源の欠如による燃料輸入の必要に外貨を食われるためばかりでなく、相対的にまだ産業構造が一次産業中心型で資本財の必要度が低いためともいえる。この点はタイと比較すると、その発展段階による構造の違いが一層明らかとなる。つまりタイのばあいは、フィリピンと同じように鉱物性燃料の需要が大きいにもかかわらず、資本財への輸入需要も不可欠であったために、資本財の割合を減少させることは不可能であったとみられるのである。

フィリピンとタイを比べてみるとタイの方が一層急速な消費財の輸入代替を行なったことが分かり、この15年間に全輸入に占める消費財輸入の割合が31%から11%に減少しているのに対し、フィリピンは12%から10%とあまり減少していない。もっともフィリピンにおいては初めから消費財輸入の全輸入中の比率は低かったのであるが、タイは消費財原料と資本財の輸入をフィリピンと比べると一層急速に伸ばして輸入代替を促進せしめた結果、1975年にはフィリピンとほぼ似た消費財輸入割合を示すに至ったのである。

このように、一方で輸入需要が全体として急速に増大した反面、資源輸出にみるべきものをもたない点が、タイおよびフィリピンの貿易収支を困難にする原因であるが、一体この2国の商品輸出はどのような構造と可能性をもつのであろうか。それを本節の以下でタイおよびフィリピンのケース・スタディーとしてとりあげることにしよう。

表12 タイの対日商品別輸出

① タイから日本への輸出 (CIF. 日本通関統計)

② 総タイ輸出に占める日本のシェア (FOB. タイ統計)

③ 総日本輸入に占めるタイのシェア

④ 単価 (CIF. \$/MT)

単位 { 数量=MT
価格=1,000 US \$

		1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
		数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)
冷凍チキン	①	534	840	170	263	2,030	3,337	3,916	7,356	9,159	16,845	14,187	27,753
	②	99.9%	100.0%	98.5	98.9	99.8	99.9	99.6	99.6	99.7	99.8		
	③	2.2%	2.7%	0.8	1.0	5.5	7.5	8.5	12.0	15.3	19.5	20.2	25.6
	④		1,573		1,547		1,644		1,878		1,839		1,956
魚 (冷・生)	①	1,244	1,700	1,456	2,046	1,381	2,270	1,604	2,741	1,844	3,502	2,923	7,463
	②												
	③	1.5%	2.7%	2.4	3.9	2.6	4.5	2.4	3.2	2.7	3.3	4.7	6.0
	④		1,367		1,408		1,644		1,714		1,899		2,553
エビ	①	6,314	24,348	8,837	36,909	9,850	59,730	7,224	46,330	8,377	58,236	9,295	87,933
	②	64.2%	69.9%	70.8	80.6	65.7	75.6	54.2	66.7	55.9	70.5		
	③	6.1%	6.0%	7.8	8.0	7.8	7.9	5.6	5.6	5.6	5.4	5.9	6.4
	④		3,856		4,177		6,064		6,413		6,952		9,460
イカ (冷凍・生鮮)	①	5,719	11,009	9,262	20,734	7,524	19,715	8,250	18,653	10,121	27,359	10,637	44,066
	②	42.2%	58.6%	62.4	79.7	47.1	63.1	48.0	61.5	40.0	60.6		
	③	12.8%	17.5%	15.8	21.0	11.0	14.6	11.0	13.4	8.6	13.6	6.8	12.7
	④		1,925		2,239		2,620		2,261		2,703		4,143
タコ	①	314	199	704	524	2,766	2,166	4,324	3,047	2,956	2,289	6,007	5,420
	②	0.0%	0.0%	66.7	71.6	91.0	91.4	96.7	97.2	86.2	88.0		
	③	0.5%	0.3%	0.9	0.6	2.9	1.8	6.8	3.8	3.8	1.9	9.6	3.0
	④		634		744		783		705		774		902

中内：ASEAN 諸国の貿易不均衡問題

イカ（塩漬・乾燥）	①	142	629	548	3,252	553	3,972	845	6,453	365	4,808	1,166	13,755
	②												
	③	23.3%	33.8%	64.4	74.4	77.4	90.3	62.7	71.5	72.4	64.0	72.8	80.6
	④		4,430		5,934		7,183		7,637		13,173		11,797
角・骨	①	12,331	3,709	6,693	2,586	18,768	4,989	18,556	5,808	24,105	6,819	31,057	7,145
	②												
	③											33.4%	22.0%
	④		301		386		266		313	283			2,301
もやし豆	①	25,346	7,575	31,163	10,429	43,424	29,439	38,309	28,335	42,286	21,578	38,351	19,036
	②	69.4%	75.3%	71.5	80.4	94.4	96.4	93.0	94.4	71.0	77.9		
	③					93.9%	93.7%	82.5	86.3	88.0	88.7	83.7	85.1
	④		299		335		678		740		510		496
豆	①	9,644	2,452	9,903	2,753	18,450	6,424	13,868	5,872	15,498	5,670	17,693	5,698
	②	5.3%	5.4%	4.2	4.6	23.1	30.3	7.9	11.2				
	③	6.0%	4.7%	6.4	5.6	8.8	6.6	6.7	4.7	12.0	8.3	14.2	9.0
	④		254		278		348		423		366		322
冷凍果実・冷凍野菜	①	677	323	18	10	339	151	4,522	2,341	19,154	13,176	12,580	7,022
	②												
	③	1.1%	0.9%	0.1	0.0	0.6	0.4	6.1	4.5	18.8	4.1	0.2	0.2
	④		477		556		445		518		688		558
冷凍パイナップル	①	676	323	18	10	327	144	4,496	2,325	19,154	13,176	12,563	7,010
	②												
	③	6.1%	6.3%	0.4	0.5	3.9	3.5	33.4	29.5	66.6	64.8	64.6	64.0
	④		478		556		446		517		688		558
メ イ ズ	①	908,891	141,663	728,246	117,210	949,629	124,932	467,454	53,146	392,881	43,145	502,059	60,018
	②	42.5%	43.6%	39.3	39.5	40.9	39.2	25.9	22.3	27.6	25.0		
	③	15.6%	16.1%	12.6	13.5	15.2	15.2	6.9	6.7	5.0	4.8	5.9	5.5
	④		156		161		132		114		110		120

	1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)
ソルガム	①	49,950	6,477	39,974	5,977	1,846	4,089	493	589	117	1,273	493
	②	30.2%	29.1%	18.1	19.9	0.8	3.1	3.0	0.3	0.8	0.0	0.0
	③	1.3%	1.2%	1.2	1.2	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	④		130		150	123		121		301		387
タピオカフラワー・ チップ・ペレット	①	157,518	27,393	117,694	17,945	79,706	94,566	18,116	90,801	14,291		
	②	7.8%	14.0%	4.2	5.6	2.5	2.5	4.1	1.5	2.5		
	③	94.1%	94.4%	97.4	96.6	97.4	100.0	100.0				
	④		174		153	177		192		157		
ごま	①	5,139	2,407	3,051	1,738	3,212	3,829	2,713	5,330	3,331	5,595	4,355
	②	41.6%	50.4%	49.5	56.0	38.6	n. a.	n. a.	30.8	32.8	8.9	7.9
	③	10.3%	10.0%	7.7	6.8	6.1	7.0	7.2	9.9	8.0		
	④		468		570	718		709		625		778
綿実	①	6,322	1,139	10,122	1,869	3,645	4,733	810	18,852	2,877	21,988	3,583
	②	97.7%	94.0%	100.0	100.0	100.0	n. a.	n. a.	100.0	100.0	30.4	26.0
	③	5.1%	4.7%	8.7	7.6	3.8	5.0	4.9	20.6	18.5		163
	④		180		185	140		171		153		
ひまの種	①	24,446	9,703	21,239	5,230	22,815	32,237	12,315	21,544	8,850	19,107	8,046
	②	86.8%	86.2%	99.0	99.0	44.5	n. a.	n. a.	51.4	51.4	52.2	51.8
	③	64.1%	62.7%	58.9	59.8	50.2	74.1	75.1	69.1	70.4		421
	④		397		246	284		382		411		
ラック	①	1,608	2,952	1,236	1,058	1,975	1,859	900	1,828	725	2,006	1,389
	②										93.3%	87.8%
	③											692
	④		1,836		856	600		484		397		

中内：ASEAN 諸国の貿易不均衡問題

カボックの種	①	11,997	2,304	14,474	2,304	15,631	2,538	8,684	1,734	4,150	852	
	②	97.1%	96.9%	91.7	97.4	100.0	100.0	n. a.	n. a.	100.0	100.0	
	③	62.4%	67.1%	90.7	90.8	94.5	95.3	89.0	90.3	83.8	84.2	
	④		192		159		162		200		205	
イカ（スルメなどの調製品）	①	1,164	4,866	1,270	5,484	1,260	5,910	701	2,767	1,213	6,591	5,714
	②											
	③	18.9%	17.9%	18.1	18.2	21.6	21.1	23.4	19.2	49.4	56.7	54.4
	④		4,180		4,318		4,738		3,947		5,434	6,442
砂糖	①	220,396	98,274	308,365	206,550	662,500	223,109	621,306	127,146	386,417	76,247	141,231
	②	55.1%	56.4%	53.5	54.4	62.1	62.0	37.9	37.0	39.6	38.6	
	③	8.0%	8.5%	12.5	12.3	27.3	23.3	23.0	17.8	17.0	13.1	19.8
	④		446		670		337		205		197	226
糖蜜	①	256,907	18,993	202,280	14,444	300,261	16,166	342,475	20,829	375,745	22,144	22,962
	②	50.7%	51.8%	44.6	47.0	45.4	47.0	46.4	46.0	65.0	63.1	
	③	23.4%	22.7%	24.7	22.9	36.1	36.0	42.9	41.7	45.4	40.8	30.9
	④				71.4		53.8		60.8		58.9	73.4
パイナップルかん詰	①	179,000 ^(C/S)	2,124	97,000	1,186	143,000	1,893	238,000	3,505	297,000	4,686	4,979
	②	16.6%	19.5%	3.7	4.2	5.4	6.7	5.5	7.3	5.8	8.1	^(MT) 5,692
	③		15.5% ^(C/S)		23.3		19.6		22.1		23.1	23.4 ^(MT)
	④		11.9		12.2		13.2		14.7		15.8	875
ヤングコーンかん詰	①	56	33	17	19	19	37	68	122	194	202	288
	②	56.9%	36.3%	5.3	6.7	19.3	25.5	24.6	26.0	36.0	39.8	
	③	2.4%	2.1%	2.9	5.7	2.0	6.1	7.2	14.8	13.1	15.3	16.7
	④		589		1,118		1,947		1,794		1,041	1,530
エタノール	①							^(MT) 5,161	1,293	7,628	1,995	4,067
	②											
	③							3.2%	3.3% ^(C/S)	4.2	4.2	6.7
	④								251		262	296

		1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
		数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)
蜆	①	188,393	11,744	147,929	8,884	121,623	6,888	136,421	8,045	106,701	6,192	130,235	8,991
	②	69.0%		60.0		48.0				54.0			
	③		32.0%		36.0		28.0	52.0%	33.0			28.0	35.0
	④		62.3		60.1		56.6		59.0		58.0		69.0
薬品 (抗生物質)	①	^(kg) 3,600	3,760	3,750	3,998	3,700	4,357	4,950	5,959	5,301	6,539	7,050	9,484
	②												
	③	1.0%	5.1%	2.1	4.1	1.7	3.0	2.5	4.7	1.6	4.0	1.7	5.5
	④		^(\$/kg) 1,044		1,066		1,178		1,204		1,234		1,345
天然ゴム	①	186,706	130,253	205,463	110,361	197,428	143,380	211,700	164,971	250,961	225,030	268,884	323,903
	②	49.2%	46.8%	55.8	55.0	51.8	53.0	53.0	53.1	55.8	54.6		
	③	58.2%	56.7%	66.4	65.9	64.7	64.6	66.6	66.3	66.2	65.5		67.5
	④		698		537		726		779		897		1,205
原皮	①	152	631	122	561	169	786	131	855	362	1,319	634	2,421
	②												
	③	0.7%	3.4%	0.5	3.2	0.6	2.5	0.5	2.6	1.3	3.2	0.3	0.4
	④		4,151		4,598		4,651		6,527		3,644		3,819
木材 (除く製材)	①	^(C/S) 93,000	11,000	23,000	9,000	28,000	13,000	28,000	13,000	18,000	12,000	9,334	11,854
	②			28.1%	50.5%								
	③	0.2%	0.3%	0.1	0.4	0.1	0.4	0.1	0.4	0.0	0.3	0.0	0.2
	④		^(\$/C/S) 118		391		464		464		667		1,270
繊維原料	①		6,919		1,875		4,275		3,219		2,040		
	②				10.8%								
	③		0.4%		0.1		0.2		0.2		0.1		
	④												

織 維 製 品	①		44,505		27,558		22,518		18,988		29,291		
	②				16.6%								
	③		2.4%		2.1		1.3		1.1		1.1		
	④												
ケ ナ フ	①	31,809	6,253	4,739	1,173	14,769	3,511	10,573	3,079	6,212	2,036		
	②	13.0%	12.2%	3.7	3.9	10.3	11.4	17.2	18.7	3.1	2.0		
	③												
	④		197		248		238		291		328		
タ イ シ ル ク	①	61,727 ^(m²)	309	15,223	104	25,314	152	16,294	92	17,162	99	27,200	215
	②												
	③	100.0%	100.0% (\$/m ²)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	④		5.0		6.8		6.0		5.7		5.8		7.9
カボック・ファイバ	①	5,296	3,174	5,089	3,320	7,336	5,367	6,404	5,378	6,331	5,095	7,480	5,950
	②	26.4%		34.5		35.4		41.5		37.6			
	③	21.9%	19.9%	100.0	100.0							96.4	96.3
	④		599		652		732		840		805		795
ジュー ト 製 品	①	18,100	30,499	31,609	18,265	20,967	11,003	17,053	9,226	23,041	12,914		
	②												
	③												
	④		525		578		525		541		561		
ガ ー メ ン ト	①	183,309 ^(ダース)	4,221	177,594	4,402	103,246	3,451	108,418	2,447	116,199	2,701		
	②												
	③												
	④		(\$/ダース)		24.8		33.4		22.6		23.2		
織 物	①	14,742 ^(千平方ヤード)	6,321	10,873	3,815	14,878	6,397	14,099	6,288	25,252	10,723		
	②												
	③		(\$/千平方ヤード)										
	④		0.43		0.35		0.43		0.45		0.42		

		1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
		数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価格 (1,000 \$)
貴石・半貴石	①	(kg) 298	10,624	136	16,631	113	14,580	118	15,887				
	②												
	③	0.0%	0.8%	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.3				
	④		(\$/kg) 35.7		122.3		129.0		134.6				
錫・同合金	①	4,674	36,860	5,425	37,146	6,036	44,312	6,425	66,812	5,934	73,668	5,992	88,356
	②	24.7%	25.0%	34.7	34.9	30.7	31.1	28.3	28.4	21.1	21.2		
	③	15.0%	15.1%	24.6	24.5	19.3	19.2	22.6	22.7	20.5	20.5	19.6	19.6
	④		7,886		6,847		7,341		10,399		11,415		14,746

日本通関統計は円建てのため、次の為替レートでドルに換算した。 1974年1\$=219.39円, 1975年1\$=296.69円, 1976年1\$=297.00円,
1977年1\$=270.53円, 1978年1\$=212.17円, 1979年1\$=219.17円

出所：①, ③, ④ 大蔵省, 日本貿易月報（通関統計） ② Foreign Trade Statistics of Thailand

表13 本論の検討品目合計の対日輸出に対する割合、対前年比

	本論での検討品 目合計輸出額 (1)	対日本輸出額 (2)	(1)/(2)	(1)の対前年比	(2)の対前年比	タイの全世界 輸出額の対前 年比
	千ドル	千ドル	%	%	%	%
1974年	627,534	685,784	91.5			
1975年	676,534	723,729	93.5	107.8	105.5	90.4
1976年	785,809	848,041	92.7	116.2	117.2	135.1
1977年	671,402	748,201	89.7	85.4	88.2	117.1
1978年	697,574	842,662	82.8	103.9	112.6	116.7

1. 今回検討した品目で80～90%をカバーしている。
2. しかし、その比率はここ2年で10%低下している。
3. タイの日本への輸出は1977年に落ち込み、1978年に多少回復しているが、本論で検討した品目は1978年になっても、ほぼ横ばいである。
4. タイの全世界向け輸出は、安定した伸びを示している。
5. タイからの輸出（日本向け）は、検討品目については5年間で11.2%、年率2.7%、全輸出では5年間で22.9%、年率5.3%しか伸びていない。
同じ期間にタイからの全世界輸出額は66.8%（年率13.6%）の伸びを示している。
また、日本からのタイ輸入量は5年間で、60.6%（年率12.6%）伸びている。

(ii) タイの商品別対日輸出²⁾

年次によって異なるが、タイ全輸出総額の8～9割になる個別商品40について、1974年から79年までの日本向け輸出をまとめたものが、表12である。商品名のすぐ右欄の数字は表題下に明示されているように、輸出額、タイ輸出および日本の輸入に占める比率、単価を示している。表13で明らかなように、これら輸出額の対日輸出総額に対する比率が、最も多い1975年で93.5%、最も少ない1978年でも82.8%を占めているから、これらの動向をみることにより、タイの日本向け輸出の動向の基本部分を説明しうるとみなせるであろう。

さて、この個々の商品輸出の動向をまとめてみると次のようになる。まず、これらを①増加見込みのもの、②現状維持のもの、③減少見込みのものの3グループに総括してみる。

① 増加見込みのもの

冷凍チキン、冷凍果実（パイナップル）、パイナップルかん詰、ヤングコーンかん詰、薬品、タピオカフラワー、もやし豆、天然ゴム、エビ、エタノール、砂糖、綿実、織物、ガーメント、ジュート製品

② 現状維持のもの

雑豆、錫、ラック、イカ、タコ、魚、糖蜜、カポック・フェイバー

③ 減少見込みのもの

メイズ、ソルガム、タピオカ・ペレット、原皮、木材、螢石、ひまの種、ごま、カポックの種、ケナフ

①のうち、特に大きな伸長が見込まれるものには、品質が良好とされる冷凍チキン、冷凍パイナップル（これは国内需要が大きい）、天然ゴム（建築需要増大の可能性が大きい、

価格上昇中）、ガーメント（ワコールの製品が増大）などがあげられる。

また③の中で、全く期待できぬものとしては、ソルガム（品質および価格）、タピオカ・ペレット（品質および価格）、木材（現地生産不足）があげられる。

これらの商品動向から今後のタイの輸出見通しを予測すると、量的予測は困難であるが、下の理由により、増加期待はもてると考えられる。

①対日輸出の主要5品目のうち、ゴム、砂糖、エビの伸長が期待され、錫は安定的である。メイズの減少があっても大幅な減少は考えられない。主要商品による増大期待が大きい。

②非伝統的な冷凍チキン、冷凍パイナップルの順調な伸びが見込まれ、これに加えて、新規商品である薬品、ガーメントなどの工業製品の着実な伸びが予想される。

③以上、①、②によって、減少品目は十分カバーして余りがある。

しかし、貿易収支不均衡の行方については、日本からの輸入の90%は重化学工業品で、これらの輸入代替産業の育成は当面不可能であるから、輸入資材の価格上昇による輸入増加は避けられないと考えられる。前節でも一般論として考察したように、タイの対日貿易収支不均衡を急速に改善せしめる方法はないと思われる。だが従来存在しなかった新規品目が伸長しつつあるところからみても、今後、長期的観点から、タイの輸出競争力を増大させるような産業政策を日・タイ相互協力の上で選択していくことが必要である。

(iii) フィリピンの商品別対日輸出³⁾

続いてフィリピンの商品別対日輸出をタイ

2) 本節のデータは1979年9月から1980年3月まで、隔週に1度ずつ5大商社のタイ駐在員経験者と研究会を開き、そこで提出された商社側の情報を念頭に置きつつ、公表統計と合わせて筆者の責任でまとめたものである。

3) タイの研究会の行われない週に隔週に開いた同期間のフィリピンの駐在員経験者との研究会を通じて、注2のばあいと同一の方法によって収集されたデータにもとづく。

表14 フィリピン の 対 日 商 品 別 輸 出

① フィリピンから日本への輸出 (CIF. 日本通関統計)
 ② 総フィリピン輸出に占める日本のシェア (FOB. フィリピン統計)
 ③ 総日本輸入に占めるフィリピンのシェア
 ④ 単価 (CIF. \$/MT)

単位 { 数量 = MT
 価格 = 1,000 US\$

	1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数 (MT)	価 格 (1,000 \$)
冷凍マグロ・カツオ	①	426	281	1,001	4,596	3,377	3,706	3,822	1,149	848	1,627	1,883
	②											
	③	0.1%	0.4%	0.8	4.3	2.2	2.7	1.5	1.0	0.4	1.6	5.6
	④		666	616		735		1,031		739		1,157
冷凍エビ	①	1,521	5,700	1,107	2,082	13,280	2,394	16,660	2,791	22,350	3,701	37,178
	②	74.6%	73.6%	66.3	79.3	85.1	87.8	90.4	93.3	94.9		
	③	1.5%	1.4%	1.0	1.7	1.8	1.9	2.1	1.9	2.3	2.3	2.7
	④		3,748	4,517		6,379		6,958		8,008		10,045
イカ	①	34	96.1	104	353.9	983.2	273	1,101.5	473	1,687.3	548	3,084.3
	②	84.6%	96.6%	94.7	94.7	94.3	94.1	96.6	93.4	95.7		
	③	0.1%	0.2%	0.2	0.4	0.7	0.4	0.8	0.4	0.8	0.4	0.9
	④		2,826.5	3,492.9		3,980.6		4,034.8		3,567.2		5,628.3
貝柱	①	114	284.8	35	97.7	43.8	121	280.9	274	1,036.9	177	660
	②											
	③	40.0%	24.0%	11.0	7.0	6.0	15.0	6.0	65.0	34.0	75.6	54.8
	④		2,498.2	2,791.4		2,576.5				3,784.3		3,727.6
玉ねぎ	①	1,177	336.3	0	2,152	569.0	3,904	1,002	2,621	716.4	561	161.7
	②	94.9%	96.7%	0	85.0	80.0	72.6	66.5	58.4	44.5		
	③	2.0%	2.0%	0	3.0	3.0	10.0	11.0	3.0	3.0	0.8	0.7
	④		285.7			264.4		256.6		273.3		288.2

生 鮮 バ ナ ナ	①	627,797	87,500	763,278	134,100	713,905	128,700	696,414	130,200	707,487	149,700	682,109	162,099
	②	97.2%	98.8%	90.2	90.9	88.1	89.1	88.9	89.8	87.6	88.5		
	③	73.0%	68.0%	85.0	81.0	86.0	80.0	84.0	79.0	88.0	84.0	86.0	84.0
	④		139.4		175.7		180.3		187.0		212.0		237.6
生 鮮 パ イ ナ ッ プ ル	①	28,772	6,380	40,029	9,121	53,855	14,007	71,502	19,754	94,475	28,656	102,190	35,325
	②	100.0%	100.0%	100.0	100.0	95.1	93.7	99.2	99.0	99.7	99.6		
	③	80.0%	77.0%	74.0	71.0	86.0	86.0	92.0	92.0	93.0	92.0	94.0	94.0
	④		221.7		227.8		260.0		276.3		303.3		345.7
生 鮮 熱 帯 果 実 (パ イ ナ ッ プ ル・バ) (ナナは除く)	①	0	0	6	13.5	64	141.4	250	451.0	333	716.4	472	926.3
	②	0%	0%	0.2	0.5	3.8	4.9	6.7	15.4	5.0	10.3		
	③	0%	0%	0.1	0.2	10.5	11.4	21.7	20.6	20.9	20.3	43.9	38.3
	④				2,250		2,209		1,804		537		1,963
冷 凍 熱 帯 果 実	①	4	6.9	8	13.5	2	3.4	0	0	2	1.4	1.2	3.6
	②	97.0%	92.4%	94.4	73.9	70.7	35.0	88.8	62.4	98.9	95.5		
	③	2.3%	5.3%	5.1	12.5	0.8	3.4	0	0	1.5	1.5	0.7	2.3
	④		1,725		1,688		1,700				700		3,038
冷 凍 パ イ ナ ッ プ ル	①	143	54.9	10	6.7	11	6.7	10	3.7	233	179	281	215
	②												
	③	1.3%	1.1%	0.2	0.3	0.1	0.2	0.1	0.1	0.8	0.9	1.4	2.0
	④		383.9		670		609		370		768		764
コ ー ヒ ー 豆	①	0	0	0	0	1,330	731	1,400	1,940	488	274	310	765.1
	②	0.8%	1.5%	2.2	2.3	9.8	9.2	4.4	4.4	5.0	4.9		
	③	0.0%	0.0%	0.0	0.0	0.9	0.7	1.0	1.1	0.5	0.4	0.2	0.1
	④						549.6		1,385.7		561.4		2,468
そ ば	①	0	0	0	0	0	0	11	2.1	16	3.53	13	3.1
	②	0%	0%	0	0	0	0			100	100		
	③	0%	0%	0	0	0	0	0.02	0.01	0.03	0.2	0.02	0.02
	④		0		0		0		190.9		220.6		241.5

	1974年		1975年		1976年		1977年		1978年		1979年	
	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)	数量 (MT)	価 格 (1,000 \$)
ひまの種	①	3,510	1,177	833	3,096	858	4,736	1,704	6,802	2,617	11,605	5,026
	②	91.0%	95.8%	96.3	96.3	95.8	85.6	86.7	95.4	95.8		
	③	9.2%	7.7%	9.9	6.8	6.8	10.9	10.4	21.8	20.8	31.7	32.3
	④		335	231		277		360		385		433
コブラ	①	34,329	22,018	10,086	65,921	14,808	48,466	19,730	42,448	17,939	5,071	2,914
	②	12.6%	13.6%	4.7	4.5	9.6	7.8	9.0	10.7	12.0		
	③	39.8%	41.5%	41.3	42.6	59.5	49.6	51.2	45.0	49.5	9.1	8.1
	④		613.8	263.4		218.9		399.9		422.6		574.6
ヤシ油	①	16,776	16,597	19,974	8,020	22,661	27,964	16,013	28,423	17,870	42,940	43,659
	②	5.1%	4.5%	3.5	3.4	2.8	3.9	3.5	2.8	2.8		
	③	96.3%	95.6%	93.1	93.4	74.1	99.9	99.9	99.0	98.8	89.6	90.1
	④		996.5	400.3		365.8		570.3		628.7		1,016.8
カツオ節・その他の魚節	①	12	24.0	22	43.8	132	180	517.5	117	358.2	174	650
	②											
	③	2%	2%	2	1	5	6	5	5	5	11.0	13.7
	④		,000.0	1,990.9		2,525.0		2,875.0		3,061.5		3,735.6
砂糖	①	127,807	80,112	595,760	428,543	106,606	230,065	42,591	54,836	10,267	287,592	68,192
	②	14.5%	21.5%	50.8	55.8	6.1	9.3	9.9	5.4	5.1		
	③	4.6%	6.9%	24.0	25.5	4.4	8.5	5.8	2.4	1.8	10.8	9.0
	④		627	719		385.1		185.1		187.2		237.1
糖蜜	①	545,000	42,000	448,000	25,000	440,000	452,000	28,000	316,000	23,000	324,831	30,955
	②	93.5%	92.1%	87.5	90.0	75.9	93.2	92.6	98.7	98.4		
	③	49.4%	49.6%	54.7	59.4	45.8	49.5	51.1	33.5	37.6	38.7	41.7
	④		76.8	83.9		53.2		62.9		71.6		95.3

チ ャ ー イ ン ガ ム	①	296	772.2	414	883.1	541	1,212	302	632	524	1,112	428	998
	②	0.2%	0.2%	7.0	5.5	14.1	12.6	2.0	1.2	15.8	15.2		
	③	19%	22%	35	32	56	56	61	56	69	70	46	45
	④		2,608.8		2,133.1		2,240.5		2,093.0		2,122.7		2,332.0
フルーツピューレ・フルーツペースト	①	58	41	4	3	5	3	0	0	0	0	0	0
	②	42.6%	37.4%	9.6	11.2	10.8	8.8	0	0	0	0	0	0
	③	5%	4%	0.3	0.3	0.6	0.6	0	0	0	0	0	0
	④		710.3		850.0		680.0						
パ イ ン か ん 詰	①	8,103	4,709	2,844	1,904	3,897	2,913	5,949	5,024	7,378	6,914	7,328	7,680
	②	7.4%	6.9%	2.0	2.1	2.8	3.4	3.4	4.9	4.2	4.7		
	③	34.0%	35.0%	36.0	38.0	28.0	32.0	29.0	33.0	32.0	36.0	32.0	36.1
	④		581.1		669.6		747.4		844.4		937.2		1,048
調製した熱帯果実	①	0	0	0	0	756	387	612	274	723	349	887	503
	②	0%	0%	28.8	21.2	72.8	65.3	64.2	51.7	59.2	48.1		
	③	0%	0%	0	0	35	36	36	35	34	31	35	31
	④						512.2		446.9		482.4		567.1
パ イ ン ジ ュ ー ス	①	(M) 61	17	181	54	219	77	225	85	210	85	(M) 265	125
	②	0.5%	0.9%	1.0	1.6	3.7	5.2	1.0	1.8	7.3	8.7		
	③	19%	22%	99	100	96	92	82	79	100	100	94.6	92.2
	④		282.0		297.8		353.4		377.8		403.8		470
ビ	①	(M) 50	21.4	328	147.9	471	221.1	223	114.4	323	173.3	317	188.7
	②	1.7%	1.7%	2.8	2.8	4.2	4.2	4.4	9.2	5.0	4.9		
	③	2.6%	2.0%	11.8	8.3	12.7	9.2	3.7	2.7	4.2	2.8	3.2	2.2
	④		428		451		469.4		513		536.5		595.3
葉 タ バ コ	①	1,969	3,717	4,064	6,957	3,152	5,330	2,563	4,761	2,006	4,185	2,717	5,196.7
	②	8.6%	14.5%	14.8	23.8	9.0	14.7	10.5	13.8	10.4	14.8		
	③	2.5%	1.9%	4.4	2.4	3.2	1.7	3.1	1.6	2.3	1.1	3.5	1.5
	④		1,888		1,712		1,691		1,858		2,086		1,912.7

	1974年				1975年				1976年				1977年				1978年				1979年			
	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)	数量 (MT)	価格 (1,000\$)
鉄	①	1,636,426	21,616	1,516,817	20,616	893,450	13,440	2,052,825	66,756	3,622,575	1,283,638	4,044,543	152,965											
	②	99.3%	99.6%	98.7	99.4	99.3	99.6	97.8	99.5	98.1	99.5													
	③	1.2%	1.0%	1.2	0.9	0.7	0.6	1.5	2.9	3.2	5.2	3.1	5.1											
	④		13.2		13.6		15.0		32.5		35.5		37.8											
銅	①	886,115	433,963	769,472	226,365	814,000	249,831	804,000	234,724	818,000	269,595	887,588	425,871											
	②	94.0%	92.0%	85.6	100	78.5	76.9	74.0	70.5	82.2	79.6													
	③	28.4%	26.9%	29.5	28.0	31.5	29.3	28.5	26.5	29.0	28.8	29.9	28.2											
	④		489.7		294.2		306.9		291.9		329.6		479.8											
ニッケル	①	3,642	1,629	250	170	3,611	4,040	393,258	12,567	632,000	18,381	758,498	19,852											
	②	100%	100%	100	100	100	100	100	100	100	100													
	③	0.0%	0.1%	0.0	0.1	0.1	3.1	10.0	8.5	21.1	19.4	18.9	15.6											
	④		611.6		680		1,162.2		32.0		29.1		26.1											
亜鉛	①	12,040	2,971	20,101	4,976	20,000	4,377	30,000	5,914	22,000	3,299	18,453	4,782											
	②	87.3%	88.3%	79.2	80.5	100	100	97.1	90.4	100	100													
	③	1.0%	1.1%	2.1	2.4	2.0	2.0	3.1	3.2	2.3	2.4	1.9	2.7											
	④		246.8		247.5		218.8		197.1		150.0		259.1											
クロム	①	127,033	6,434	152,907	13,640	149,000	16,835	41,000	4,066	74,000	7,869	183,558	16,679											
	②	31.6%	43.0%	31.5	49.5	43.9	60.4	17.2	22.1	21.4	27.9													
	③	11.0%	9.8%	12.1	10.2	12.2	12.8	4.6	4.2	11.0	12.7	19.1	20.6											
	④		50.6		89.2		113.0		99.2		95.5		90.9											
木材	①	4,188	291,475	3,109	160,586	1,952	145,067	1,738	150,493	1,908	172,249	1,400	209,859											
	②																							
	③																							
	④		69.6		51.7		74.3	4.1%	86.5		90.3	3.1	3.3%											
ラシン	①	38,576	7,840	16,070	2,889	19,576	5,330	68,688	8,567	105,540	12,613													
	②																							
	③																							
	④																							

ベニ	①	(m³) 2,806	849	1,297	370	745	246	3,705	295	432	102	
	②											
	③		(\$/m³) 302		285		330		79		235	
	④											
コアーストック*	①	(m³) 2,082	625	1,860	313	1,622	347	5,479	616	17,789	2,554	
	②											
	③											
	④		301		168		213		112		144	
プライウッド*	①	(m³) 2,312	730	161	43	0.2	0.08	1,151	243	6,086	1,082	
	②											
	③		(\$/m³) 316		267		333		211		178	
	④											
繊維原料	①		7,478		3,889		5,321		5,122		5,811	
	②											
	③		0.4%		0.3		0.3		0.3		0.3	
	④											
繊維製品	①		7,608		3,598		10,250		5,701		7,492	
	②											
	③		0.4%		0.3		0.6		0.3		0.3	
	④											
IC	①					(kg) 59,009	11,624	44,167	7,907	63,630	12,672	141,906
	②											
	③					13.9%	5.5% (\$/kg) 197.0	10.9	3.8	10.4	4.4	13.8
	④								179.0		199.2	26,159

日本通関統計は円建てのため、次の為替レートでドルに換算した。 1974年1\$=219.39円, 1975年1\$=296.69円, 1976年1\$=297.00円,
1977年1\$=270.53円, 1978年1\$=212.17円, 1979年1\$=219.17円

* 現地の FOB 統計

出所：①, ③, ④大蔵省, 日本貿易月報 (通関統計) ② Foreign Trade Statistics of the Philippines

表15 本論の検討品目合計の対日輸出に対する割合、対前年比

	本論での検討品 目合計輸出額 (1) 千ドル	対日本輸出額 (2) 千ドル	(1)/(2) %	(1)の対前年比 %	(2)の対前年比 %	フィリピンの 全世界輸出額 の対前年比 %
1974年	1,022,226	1,104,819	92.5		134.7	
1975年	1,044,572	1,121,029	93.2	102.2	101.5	85.0
1976年	720,423	793,099	90.8	67.6	70.0	113.2
1977年	788,478	897,376	87.9	101.7	113.1	123.1
1978年	915,045	1,057,770	86.5	109.2	117.9	107.9

1. 今回検討した品目で85～95%をカバーしている。
2. しかし、その比率は多少低下気味である。
3. フィリピンの日本への輸出は1976年に落ち込み、その後回復しているが、まだ、74年の水準にも戻っていない。
4. 5年間で、日本向け輸出は4.3%（検討品目では10.5%）のマイナス成長となっている。
5. 同時期で、全世界向け輸出は15.7%の伸びを示している。
6. 同時期で、日本からのフィリピンの輸入額は、69.7%と大幅の伸びを示している。
特に、77年から78年にかけて、1年で40.5%と大幅増である。

のばあいと同様にまとめてみると、表14のようになる。表15で示されるように、これらの商品輸出の合計は対日輸出総額の約90%を占める。まずタイのばあいと同様に、これを①増加見込みのもの、②現状維持のもの、③減少見込みのものに分けてみると次のようになる。

① 増加見込みのもの

①砂糖 これは数量的よりもむしろ価格の上昇により、不均衡改善に貢献する要因である。②糖蜜 砂糖価格の上昇につれて糖蜜の価格は上昇するので輸出は増加傾向。③農水産および加工品 この中で可能性のあるものはパパイアである。解禁が行われれば毎年3,000トンくらいは日本向けに輸出が見込まれる。④葉タバコ フィリピンの乾燥設備の拡充につれて今後の伸びが期待される。1980年に日本の総輸入78,000トンのうちフィリピンは2,000トン(3%)であったが、1984年には90,000トンの6%の5,000トン、金額では20万ドルくらいになる予定。⑤パインかん詰 日本の輸入割当てが廃止される可能性あり。そうすれば増加期待。⑥調整済み熱帯果実 品質問題を解決できれば拡大

の余地がある。⑦冷凍エビ この日本輸入量は増加傾向にあり、制約要因はむしろフィリピン側にあるので、品質と価格が改善されれば伸びる。養殖エビの可能性は、フィリピン漁業が漁場の分散のため、大量の漁獲量を確保しにくい状況にあるので、これを伸ばすことは望ましい。⑧冷凍マグロ・カツオ 拡大は可能だが、価格の推移とフィリピン側の漁獲量に限界がある。⑨そば 栽培が本格化すれば、ブラジル、南アフリカのシェアに食い込める分だけ日本向けの輸出増大が可能と考えられる。⑩労働力の輸出 1978年はヤシ油に次ぐ外貨獲得源になっており、1979年には10億ドルの水準に達する。英語を話す利点があり、中近東の工場で船員、看護婦が主。⑪コプラ・ココナッツ油 コプラでの輸入は減少しているが、ココナッツ油は石油価格が上昇する限り工業需要は増大するとみられる。さらに花王石鹼が高級アルコールまで製品化して輸入する計画をすすめている点など、付加価値をより多くする形でインバランス改善効果が期待されている。⑫鉱産物 伸びる可能性の大きいものは銅精鉱であり、過去も漸増傾向を示している。1983年にフィ

リピンで銅製錬所が動き始めるため、ブリストーや地金での輸入に代替される可能性がある。⑬繊維製品 日本の繊維輸入金額は1978年から79年にかけて倍増しているが、フィリピンはその10%にしかすぎない。ガーメントはフィリピンの品質が低いため見込みが薄い。労働集約的な品目については若干の増加が期待できる。ラミー・アバカはむしろフィリピン側の作付面積の減少に問題がある。日本の需要は増加しているので、アバカ・パルプの可能性もある。⑭IC 将来有望。ただし需要の変動が大きい点に問題がある。⑮木材 1975, 76年に一時的減少をみたが、今後の対日輸出は増大傾向を辿る予想。

㊤ 現状維持のもの

イカ、貝柱、生鮮バナナ、生鮮パイナップル、生鮮熱帯果実、玉ねぎ、コーヒー豆、チューインガム、ビール、パインジュース、フルーツピューレおよびペースト、冷凍パイナップル、カツオ節・その他の魚節、しょうが、鉍産物（ニッケル鉍、亜鉛精鉍、クロム鉍）

㊦ 減少見込みのもの

もしフィリピン側で生産増大努力が行われないとすると、次の品目がこれに該当する。生鮮バナナ、コプラ、ガーメント。

以上のカテゴリーを総括すると、フィリピンの対日輸出は20%弱の年間増大率を示すが(表15)、タイのばあいと同様、日本からの輸入の9割は工業品が占め、しかも年率40%の伸びを示して、フィリピン側の逆調の原因を構成している。タイと同様、急速に対日貿易不均衡を改善することは不可能である。だが、少し長期的な観点からすれば、楽観的ファクターもないではない。以下少しく改善への動向を探ってみよう。

(iv) 貿易収支改善への方策

まず一次産品をベースにした工業化の方向

が考えられる。たとえばタピオカ、さつまいもからとるアルコールが考えられるほか、ICのように一層高度の電子工業製品も、先進工業国製品の部分中、労働集約的な部分をフィリピンで生産し輸出することが有利である。これは、すでに労賃の高くなった韓国および台湾から徐々にフィリピンに移っていることをみても明らかである。日本経済との有機的な相互依存関係が密接化するにつれて、このような例は増大してくるだろう。それらの製品は日本市場や、第三国市場へと輸出される。

だが、一般にフィリピン製造品を日本市場向けに輸出すること、さらにそれを増大することは容易ではない。日本市場には、米国や豪州・ニュージーランドにはみられない品質の要求水準がある。これは日本社会の中産階級化が急速にすすんだ結果、品質の均一化が高度に求められてきたためで、少しでも欠点がある商品は価格面で大きなハンディキャップをもつことになる。当面の問題としては、フォアマンレベルの人材を交換して具体的な流通面の技術向上を図るべきである。一般的に人的交流を活発に行うことが両国の貿易の拡大にとって重要である。市場特性に関する詳細な情報はもとより、広く両国の経済・社会・文化に対する相互理解を図ることが必要である。貿易インバランス問題が感情面の問題だとする見方もあってみれば、なおさらこの点は強調されねばならない。相手市場の事情にうといことは疑心暗鬼をよぶばあいがある。たとえばフィリピンで起こった例は、検査官が日本人によって占められることに対する不安である。両市場に通じていて、双方から共通の信頼を受ける人物がいて、日本側で不当に低い格付けが行われたのではないという保証を与えられれば、感情的こじれを起こさないで済む。

タイ国においても、輸出拡大策として中東、

共産国などの市場開拓の努力がなされているが、日本市場の開拓についてもタイ自らの売込み努力をする必要がある。政府のバックアップで誕生したタイ総合商社を中核に、日本市場を自らの手で拡大する必要がある。さらに、有力商品の安定的な供給確保（エビ、イカ、ジュート製品）、輸出可能品目の生産強化（ごま、ヤングコーン、カボック・ファイバー）、あるいは集荷体制の整備などが望まれる。

フィリピンについていえば、上のほかにも次のような努力が望まれる。輸出加工区の設定とその拡充である。現在マクタン、バギオで具体的にすすめられているが、それを一層伸ばすことが望ましい。次に、資源加工型大型プロジェクトの建設があげられる。フィリピンで考えられているのは銅精錬やリン酸肥料、一貫製鉄などである。これは先進国から資本と技術を導入して自国の資源を加工し、付加価値を高めて輸出しようとするものである。

工業化の進展につれて、工業品輸出の多角化を図りつつ輸出をダイナモとして経済成長率を高めていこうという政策は、全体的にみて適切な政策ということができる。

一方、日本側で協力すべき点としては、第1はこれら2国産品に対する需要喚起・拡大策を講ずること、第2は他市場からこれらの市場へ市場転換を行う可能性を検討すること、第3は日本からの経済協力資金を新輸出品目の開発に利用すること、フィリピンの例でいえば、ミンダナオ島の資源総合開発、あるいは新商品の発見と輸出の拡大に焦点を絞った道路港湾改良、建設、運河掘削、冷凍冷蔵設備を含む流通機構の整備、ラテライトなどの新輸出品目の発見と非伝統品目の輸出振興などに努めることである。第4は直接的に日本に対する輸出にはつながらなくても、フィリピンの貿易収支改善につながるという見

地から、対 ASEAN 輸出の増大の可能性を検討することである。この点で日本の総合商社のもつ機能を一部提供して協力することも考えられよう。第5に、日本が受注した海外の巨大プロジェクトにフィリピンの労働力や産物を利用することで、これも総合商社の機能提供を伴う。第6はわが国への一次産品輸入の長期安定化のために長期輸入契約を締結すること、第7はIMFの補償融資制度、UNCTADの共通資金、STABEX (ASEBEX)の早期実現を前向きに検討すること等等である。

IV 工業化と貿易均衡の可能性

(i) ASEAN 諸国の輸出構成

前節でタイおよびフィリピンの対日輸出品を検討したが、それらは総体として農水産品が多く、増加はしても、一方で日本からの重化学工業品輸入のより急速な増大にはおおよぶべくもなく、結果として対日貿易収支逆調は拡大傾向を示している。やや長期的にみるならば、この傾向を是正するためには、タイ、フィリピンともに、工業化をすすめ、農産物や鉱産物の加工度を高めて付加価値を増大する方策をとる必要がある。これは域外先進国への輸出を増大する途であると同時に、冒頭に述べたような ASEAN 内の黒字国であるインドネシアおよびマレーシアに対する輸出が増えて、三角貿易的な均衡の可能性がでてくるからである。

表16は ASEAN 各国の輸出構成の変化を示したものであるが、タイ、フィリピンについていうと、農業国を反映して15年間に食料の比率は増大している。だが、1975年には両国とも化学、機械の輸出が1%と小さいながらも出現しており、その他の項（SITCの6+8+9）はこの15年間に20%に至る急速な上昇過程を示している。こうした変化を将来も

中内：ASEAN 諸国の貿易不均衡問題

一層継続していく一方、前節で触れたように流通面を含む輸出拡大策が積極化されていくならば、貿易収支の逆調を将来改善することは可能であろう。

一方、石油輸出国であるインドネシアの輸出構成は、タイ、フィリピンと対照的で、輸出のほとんどがSITCの0から4までで占めており、燃料に圧倒的に依存が高まり、食料と原料の比重が減少している。タイやフィリピンからインドネシアに輸出する可能性は存在するのであって、まず貿易のチャネルを作り、成長とともに拡大していけることが望ましい。

(ii) 長期的産業構造変化と貿易収支動向

個別的な商品の動きにもとづき、輸出増大

の方向を探ってきたのであるが、結局、タイ、フィリピン、シンガポールは所得の増大とともに急速に増大する対日重化学工業品需要に見合う輸出能力をもたぬところから、貿易不均衡に陥ることが明らかである。インドネシア、マレーシアとて、重化学工業品に対する膨大な需要を有することは同じだが、幸いにして資源輸出の可能性があるために、貿易不均衡をほぼ回避しえているのである。しかし、経済の工業化と急速な発展が行われるときに、こうした貿易収支の不均衡に陥るのは資源をもたぬ国の宿命であり、雁行形態論を引用するまでもなく、経済発展史上多くの実例を有する。たとえ資源保有国であっても、中東の小人口国と異なり、多数の人口をかかえ

表16 ASEAN の輸出比率（単位%）

		食 料 0+1	原 料 2+4	燃 料 3	化 学 5	機 械 7	そ の 他 6+8+9	合 計
インドネシア	1960	13	61	26	—	—	—	100
	1965	14	46	38	—	1	1	100
	1970	12	53	33	1	—	1	100
	1975	6	17	76	—	—	1	100
マレーシア	1960	4	37	59	—	—	—	100
	1965	15	47	36	—	—	2	100
	1970	9	37	49	—	1	4	100
	1975	9	52	1	2	8	28	100
フィリピン	1960	33	64	3	—	—	—	100
	1965	28	66	1	—	—	5	100
	1970	27	63	2	—	—	8	100
	1975	38	38	2	1	1	20	100
シンガポール	1960	15	46	11	2	7	19	100
	1965	16	29	14	4	10	27	100
	1970	13	33	17	3	7	27	100
	1975	7	15	27	4	23	24	100
タイ	1960	48	51	—	—	—	1	100
	1965	56	39	—	—	—	5	100
	1970	51	31	—	—	—	18	100
	1975	62	15	1	1	1	20	100

資料：UN, ESCAP, Yearbook of Economic Statistics

注：0～9の番号は SITC 分類番号

るアジアの国は、資源輸出に永久に依存するというわけにはいかない。将来自力で外貨を獲得しうるような輸出産業の確立・拡充は長期的経済政策の至上命令であろう。そのために、域内・域外の国々との間で、産業の選択をめぐる国際分業の秩序を作りあげるための産業面での地域協力が必要となる。狭いナショナル・インタレストを越えて、地域全体の立場で比較優位にもとづく国際分業を作りあげるための国際機構が必要となるであろう。これが ASEAN のみでできるか、それともより広い太平洋地域の一環として構想されるべきか、従来 OPTAD を初めとして、いくつかの考えがないわけではない。本論の目的を越える、こういう問題の考察は、題を改めて追究されるべきであると考え、ここでは、域外の日本のなしうる協力面に言及するにとどめよう。

ASEAN 諸国がこうした工業化政策を、国際経済的関心とともに推進し始める際、重要な市場である日本は、一方で資本・技術面の協力を推進しつつ、分業秩序の形成にあたって間接的にリーダーシップをとることが期待される。そのために、わが国の産業構造自

体をまず調整して、ASEAN 諸国の輸出産業と補完的構造を作りあげ、かれらの輸出を増大させるための積極の方策をとることが望ましい。こうした産業調整政策を推進することにより、わが国は世界経済の中において経済的リーダーシップをとりうるのであって、それは ASEAN 諸国にも相促関係をもちうるものである。

むろん、このような産業調整策は、わが国の劣弱産業にとっては苦痛多き政策であるかもしれない。だが、北陸の長繊維の例にもみられるように、技術進歩によって延命が可能であり、より高級な、競争力ある製品を生みだしつつ、当該産業従事者の世代交代と合わせながらの苦痛少ない転換の途は、必ずしも閉ざされていない。産業政策・社会政策を総合的に適用しつつ日本経済の知識集約化の一環として推進すべき問題であり、この国内の産業高度化が、国際経済問題の解決にもつながっていくものと考えることができる。ASEAN 諸国の工業化と輸出を伴う所得増大は、わが国の経済の一層の充実のためには欠くことのできない条件だからである。